

1-1. 紫波町図書館の現状

紫波町図書館は2012年8月、町にはじめての図書館としてJR紫波中央駅前の町有地10.7haを中心とした都市整備事業オガールプロジェクトの中核となる施設、オガールプラザ内に開館した。人口約3万3千人の紫波町において年間18万人の来館者が訪れている。図書館は運営の三本柱として、「子どもたちと、本をつなぐ」「紫波町に関する地域資料を、収集・保存する」「紫波町の産業支援をする」を掲げ、さまざまな事業を行っている。

1-2. ビジネス支援の現状

紫波町は、食料自給率が170%を超える農業が盛んな町である。町の産業基盤である農業について、下記のような農業支援の取組を行っている。

(1) 農業支援コーナーの設置

農業に関する専門書や専門紙、オンラインデータベース「ルーラル電子図書館」など農業に関する情報を幅広く収集、提供している。

(2) 出張としょかん

図書館は町の中心部に位置しており、東西に広い町の中で居住地域によっては車がないと利用に不便な面がある。そこで「出張としょかん」として、農業専門の出版社「農文協」の協力を得て、農村部各地の公民館で野菜作りの裏技のDVD上映会を実施し、図書館の外に出て必要な情報を届ける農業支援を行っている。

(3) 産直マルシェとの連携

オガールプラザにある産直紫波マルシェの売り場各所に、図書館おすすめの料理本の紹介POPを設置。紹介している本は図書館内コーナーにて展示・貸出を行っている。

農業支援の他にも、ビジネス支援コーナーを設置し、起業やビジネスに関する資料を幅広く収集・提供している。また、若者・就職氷河期世代の就労・自立を支援している「もりおか若者サポートステーション」¹と連携し、図書館内で適職・就労相談会を2021年1月から開催している。

1-3. 課題

町民の図書館利用率は、人口の3割であり、町全体に図書館が浸透しているとは言えない。「町の通信簿(町民意識調査)」²令和元年度調査結果によると、図書館は「重要度は低い満足度が高い」に位置している。ビジネス支援に関わらず、非来館者に向けた図書館サービスの広報コミュニケーションが課題である。

2. 紫波町の現状とまちづくり計画

紫波町は、岩手県のほぼ中央に位置しており、人口33,085人(令和3年5月末現在)。町を見渡すと、豊かな自然景観の里山と紫波中央駅前など洗練されたデザインの都市機能の両方が調和しており、史跡や名所など多くの資源と営みが息づいている。こうした環境、産業、資源の多様性が町の大きな魅力である一方、受け継がれてきた産業や文化の継承が、少子高齢化や社会の変化の中で困難になっている。

紫波町では2020年3月に新たな時代を見据え、持続可能なまちづくりに向けて新しい活力と魅力を創造する「第三次紫波町総合計画」³を策定した。その中でまちづくりの基本理念として多様な人とお互いに尊重し、認め合い、つながりあう、「くらしごちのよいまち」を作ること、そして「情報」が人やコミュニティをつなぐ媒体であることから、人づくりやまちづくりに有益な情報を提供するとしている。

3. 情報拠点としての産業支援

町の情報拠点である図書館として、町の営みを一つの産業として、支援方法を考えたい。

3.1 広報

図書館サービスについて町民に向け情報発信を行う。図書館を利用しない非来館者の中には「図書館＝読書」というイメージがあり、読書習慣がない人には図書館は自分とは関係がない・必要がない場所という認識である。しかし、「本」に限らず幅広い情報の提供、レファレンスサービスなど課題解決に向けた図書館の使い方を具体的に伝えることで、図書館を課題解決の選択肢として、利用する人が増えると考えられる。実際、町の広報で図書館特集⁴が組まれた後、レファレンス件数が増加しており、「図書館でできること」への周知が不足していることが分かる。具体的な広報手段として、全戸配布の広報紙で継続的に図書館の事業紹介を行う。また、2021年6月よりSNSを利用した情報発信を開始した。各年代に合わせた情報発信を行うことで、町の課題に合わせて月ごとにテーマを決めて取り組んでいる企画展示や、専門機関との連携事業などの情報が必要な人に伝わりやすくなり、事業の効果がより多く期待できると思われる。まずは図書館が「自分にとって役に立つかもしれない場所だ」ということを一人でも多くの人に知ってもらうことが始まりで、そこから今はまだ顕在化していない多くの課題について、図書館が支援を始めるきっかけにつながると思われる。多様化する課題について、図書館資料など図書館だけの情報提供には限界があり、専門性を持つ機関との連携は必要不可欠である。現在も、図書館は紫波町社会福祉協議会と関係者が情報交換を行うミーティングに司書が参加している。ここで情報共有を図ることで相互に必要な情報を利用者に提供できている。例えば、「もりおか若者サポートステーション」と連携した適職診断・就活相談会の情報提供を行った際、社会福祉協議会がすぐに機関と連絡を取り、支援者の相談先に結び付いた。また図書館で専門的なアドバイスが欲しい際はすぐに相談できる関係作りが出来ている。今後更なる外部機関と連携する機会を作り、人と情報を結ぶ役割を強化していく。

3.2 図書館の外に図書館を

紫波町は東西に広く、交通手段を持たない町民には中央に位置する図書館の利用が不便である。月1度、移動図書館が巡回しているが、移動図書館用の資料は県立図書館からの借受資料で補っており、図書館に直接来館して利用する人との間に情報の新鮮度において差が生じている。令和2年度、新型コロナウイルスにより外出が困難となった児童の読書支援を目的に町内の児童施設に児童書を配送する事業を行ったところ大変好評であった。潜在的な読書ニーズ、知的好奇心について、来館を促すのではなく図書館が外向き、必要な資料・情報の提供を行うことで必要な支援のニーズを図ることができる。具体的には、出張としゃかんをイベントとして行うのではなく、移動図書館に加えて、司書が図書館を必要とする場所に向向き、レファレンスを含めた「図書館」を行う。個別のニーズを把握し必要な情報提供を行うことで図書館に対する信頼度を高め、利用価値が高まると思われる。

3.2 地域の魅力発信

紫波町は長く豊かな歴史と、美しい景観、町で日々の暮らしを営む人など、まちを彩るたくさんの魅力ある資源を持っている。この魅力ある資源について町民に改めて意識してもらう機会を作ることで、愛着が高まり、町の魅力をPRする人が自発的に増えることで、町の魅力が町内外に伝わり、産業および観光促進につながる。歴史を広く知って活用してもらう方法として、図書館デジタルアーカイブを活用する。図書館デジタルアーカイブは2021年に作成され、図書館で所蔵する地域資料及び教育委員会所蔵古絵図の約200点がインターネット上で公開される。デジタルアーカイブを活用した事業を行い地域の魅力を再発見、発信することで紫波町の関係人口を増やしたい。具体的な事業として以下を提案したい。

(1) 古絵図を活用したまち歩き

町の古絵図を利用し、現在の地形とリンクさせたまち歩きMAPを作成する。中心市街地以外の名所、史跡など町の観光資源を発信することで価値が高まり産業的需要を創出する。

(2) 商店街におけるまちゼミの実施

旧紫波町役場庁舎が位置していた商店街は歴史が深く、現在も多くの個人事業者が店舗を営んでいる。商工会と連携し、商店街でまちゼミを行う。商

店街の位置している場所の古地図と参加店舗をマッピングし、過去から現在の営みの変化を資料として、デジタルアーカイブに新たな資料として加える。過去と現在を結びつけることで、地図などの資料が身近なものとなり価値が生まれ、利用が促進され、新たな地域資料の創出につながる。

(3) 聞き書きによる地域の歴史の発見

令和元年度企画展示において、「聞き書き」をテーマに取り上げた。これは高齢化が進む町の住民から住民の目線で見えた生活の記憶を聞き書きし、記録にすることで、町に眠る歴史の発掘、および聞き書きを行う人を養成することで聞き書きを通して地域への愛着を生み出すことを目的としている。秋田県西明寺中学校で実施している総合学習を参考にしている。紫波町でも中学生のふるさと学習で聞き書きを行い、世代間交流によるふるさとへの愛着を高めることで、地元への定着促進につなげたい。授業で作成した聞き書きは資料としてデジタルアーカイブに掲載し、地域の歴史として発信する。

(4) 産業の情報発信

三代杜氏の一つである南部杜氏発祥の地である紫波町には4つの酒蔵がある。酒造りの工程や仕込み状況など、その酒蔵ならではの情報をアーカイブに情報として掲載することで、地元産業のPRとなる。また野菜や、果樹の生産者も同様に生産情報を発信することで町の産業支援につながる。

4. おわりに

「図書館で何をしているの？」今まで、図書館を利用していない家族や友人から何度も聞かれた質問である。そのたびに図書館の価値は使っている人しか理解されない、コップの中の議論が繰り返されているだけなのだと思ってきた。講習会に参加して図書館の価値が高まらないのは、自分のような司書の力不足と今まで外に向けた広報が圧倒的に不足しているのだと感じた。今回のビジネスライブラリアン講習会で豊田恭子講師の講義の中で「図書館は社会を救えるのか？」というスライド上に、「情報を与えるだけではダメ」で「自分とは違う考えをもつ人の思いを想像する力」が非常に印象的であった。多様性と社会変化が進む中でビジネス支援に関わらず、図書館サービスの根幹は「自分と他者は異なること」「多様性を認めあう社会」に対して、何ができるかという問を持ち続けることだと思う。よってこれからのAI時代の司書は誰よりも想像する力が必要になるのではないかと。ランガナタンの5法則「図書館は成長する有機体である」の通り、図書館は時代の変化に合わせて成長しなくてはならない。そのために、司書も研鑽を積み、行動し続けることが大切だということを改めて実感した。図書館が社会に必要な不可欠な情報インフラ施設として価値が高まるようにこれからも司書として研鑽を積みたい。

最後に多くの新しい学び・気づきの機会を作って下さり、至らぬ課題提出にも忙しい中、丁寧なアドバイスを下さった講師陣の皆様、ビジネスプランを作り上げる過程で多くの尊敬と、こうなりたいという目標を与えてくれたチーム1班の皆様、コロナ禍におけるオンライン講習会という濃密な時間を共有した全国の受講生の皆様、そして安心して受講できる環境を整えて下さった事務局の皆様に感謝申し上げます。

1 もりおか若者サポートセンター。 <http://saposute-morioka.net/> (参照 2021/3/22)

2 「町の通信簿（町民意識調査）」 (<https://www.town.shiwa.iwate.jp/chosei/kocho/1576.html>) 町の各施策に対して町民の満足度及び重要度を定期的に調査・分析することにより「町民からみた行政サービスの基準となる物差し」を明らかにし、施策を実施及び改善する上での指標としているもの

3 「第三次紫波町総合計画基本構想・前期基本計画」 (<https://www.town.shiwa.iwate.jp/chosei/keikaku/7127.html>)

4 紫波ネット 2021.2月総合版 特集「知ると便利な図書館の使い方」 (<https://shiwa.saksak.jp/back/2102/index.html>)

5 西明寺中学校校報 2018.5 (https://www.city.semboku.akita.jp/sc_saichu/gakkouhou/H3004.pdf)